

謙讓表現に見る敬語認識の変化

—敬意の表示から丁寧さの重視へ—

Changes in the Perception of Honorifics in Humble Expressions



公益財団法人日本漢字能力検定協会 現代語研究室長

佐竹 秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

✉ shinjin.sat@gmail.com

☎ 0798-68-4531

1 はじめに

近年、敬語の表現形式に関して、旧来の形式とズレを感じさせる表現が出現し、その使用が拡大している。例えば、飲食店で客が店員に向かって「お茶をもらっていいですか」と言う。「お茶をください」と頼むときに、「…してもらっていいですか」を使った言い方がされる。この言い方に対して、一定以上の年代の人間はかなり強い違和感をもつ。しかし、比較的若い世代には、ごく当然の表現のようであり、かなりオフィシャルなシーンでも使われている。こうした世代による不一致は、コミュニケーション上のトラブルの原因にもなるし、将来の敬語の変化にもつながる可能性もある。その点で非常に興味深い問題でもある。

ここでは、この種の3つの表現を取り上げる。それらの使用にはどのような意味があるのか、また、その使用拡大はどのような理由によるのかを考察する。そして、その使用拡大の裏に潜む、近年の敬語認識の変化を推測するとともに、それが敬語システムの一部の崩壊につながる可能性を含んでいることを指摘する。

2 「…してもらっていいですか」の使用拡大

依頼の表現で、ここ20～25年くらい前から急速に増加し始めたものが「…してもらっていいですか」である。

(1) 【後輩社員が先輩社員に】

課長に報告してもらっていいですか。

(2) 【顧客に対して電話で】

恐れ入りますが、お名前を聞かせてもらってよろしいでしょうか。

どちらも、現実には丁寧に依頼をするべき場面であるし、発言している当人たちもそのつもりのように感じられる。

しかし、敬語の観点からすると、(1)では、「報告してもらっていいですか」に存在する敬語は、丁寧語「です」だけである。「報告して」「もらって」「いい」には、尊敬語も謙讓語も使われていない。(2)についても、同様に、丁寧語「です」しか使われていない。つまり、敬語形式としては、敬意の高い表現とはとても言えないどころか、ほとんど敬意のない表現なのである。

それにもかからず、現実には、この「…してもらっていいですか」タイプの依頼表現が好んで使われている。しかも、使っている人は、適切な敬意表現だと思い込んでいるようである。

なぜ、この形式が好まれて使われるのであろうか。理由は2つ考えられる。

1つは「もらう」にある。「もらう」は相手から恩恵を受ける意味を示す。「もらう」によって授受関係を示すことに意味がありそうだ。

授受関係が成立するのは、一般的に、力を持っている上位者が恩恵を与え、下位者がそれをありがたく受ける場合である。そのため、授受関係と上下関係とは近接している印象がある。その近接性が利用され、「もらう」によって授受関係を示すことで、上下関係を暗示して敬語表現に変えていると考えることができる。

例えば、「先日は結構なものを頂戴しました」と述べるとき、モノの授受を通して、相手と自分の間に一時的な上下関係が存在するかのような感覚が生じる。この感覚は、現代の敬語を使用するときの認識に通じる。現代の敬語における上下関係は、固定的な関係と一致しないことが多い。客と店員のような役割による臨時的な関係にも、敬語の使用ルールが適用される。つまり、現代における敬語が成立する上下関係は、身分社会とは異なり、固定的なものではないし重大な意味もないことが多い。それに伴って、敬語もいわば「軽い」ものと認識されているのだろう。

要するに、「もらう」を使う授受表現は、近似的な上下関係をイメージさせるが、それが敬語による「軽い」上下関係の認識と感覚的に合っているのだと考えられる。だから、「もらう」が使い勝手がよいということなのであろう。

もう1つの理由は、「よいか」という相手に許諾を求める表現にある。許しを相手に求める場面だから、許しを与える側が上位者、許しを求める側が下位者の立場となる。「もらう」と同じ構造である。「よいか」と許しを求める表現を使うことが、相手を上位者として立てることになる。「よいか」を使うことが、敬語形式を使うこととの代替行為になっていると考えるとわかりやすい。

このように、本来、敬意を示さない表現形式に、今や敬意が存在するかのように人々が思い始めたということである。そして、その奥には現代敬語に対する「軽さ」の意識が潜んでいると考えられる。

3 いただく > くださる

次は、「いただく」と「くださる」のどちらも使えるシーンで、「いただく」が好まれ「くださる」が使われないという問題である。

- (3) お返事をいただきたく存じます。
- (4) 召し上がっていただければ幸いです。
- (5) ご案内いただきありがとうございました。

のように「いただく」を使った述べ方が好まれて、同じ意味を表す

- (3') お返事をくださりたく存じます。
- (4') 召し上がってくだされば幸いです。
- (5') ご案内くださりありがとうございました。

のような「くださる」を使った形式は、なかなかお目にかかれない。

「いただく」は「もらう」の敬語形式で、「くださる」は「くれる」の敬語形式であり、どちらも恩恵の授受関係を示すものである。したがって、どちらの表現でも、「与える」行為をした人物に対する敬意を表すことができるのに、なぜか「いただく」の方が好まれ、「くださる」は嫌われているのである。

これに関しては、NHK放送文化研究所(2011)に、「～くださり」と「～いただき」のどちらを使うかという調査がある。それによると、「～いただき」を使う(「～くださり」は使わない)回答がやや多くなっている。また、全体的な流れとしては、「～いただき」のほうが優勢になりつつあるという。

なぜ「いただく」が好まれるのだろうか。「くださる」は、「する」という行為をする相手を主体とした表現である。それに対して、「いただく」は、自分を主体とする表現である。例えば、「(相手が)来る」という行為に対して、相手を主体とすれば「来てくださる」、自分を主体とすれば「来ていただく」である。

「くださる」は、相手を立てる尊敬語であり、相手に直接的に敬意を示す。他方、「いただく」は、自分を低めることで間接的に相手を立てるものである。直接・間接の違いがあるのだから、その違いを利用して、場面に応じた両者の使い分けをするのがよいという考え方があった。しかし、現実には、「いただく」ばかりが使われているわけで、使い分けの精神がなくなっていることの表れとも言える。

さらに、使い分けがなくなった段階を越えて、「くださる」と「いただく」に関して「いただく」への一本化が起こり始めていると捉えることもできるのではないかな。

例えば、インターネットにおけるビジネス敬語の指南書では、

- (6) 資料をお送りいただきましてありがとうございます。
- (7) お手数ですが、ご来社の前にお電話でご連絡をいただけると幸いです。
- (8) お手すきの際に資料に目を通していただけないでしょうか。

のような例文が挙げられている。この例文で学習した人

の多くは、これらの文の主語が自分のことだと夢にも思わないのではないか。「送る」「連絡する」「目を通して」という行為を実際にする人物は相手なので、

(6)「(あなたが) 資料をお送りいただきまして」ありがとうございます。

(7)「(あなたが) ご来社の前にお電話でご連絡をいただける」と幸いです。

(8)「(あなたが) お手すきの際に資料に目を通していただける」と幸いに存じます。

だと理解する。そのときに「あなたがーいただく」の関係が不自然であることに気づかない。この段階で頭の中に「くださる」と「いただく」がまるで等しく、授受関係が成立したときは、実際の文の主語がだれであろうと、常に「いただく」が使えるのだとってしまう。

そのような学習が繰り返されれば、

(9) 大勢の方が今回の品評会に参加していただけたらと思います。

(10) 部長が資料を直接ご確認いただけると幸いに存じます。

のような表現をすることに、何の抵抗も感じなくなるはずだ。

敬意がかかわる、ある一つの行為に関して、相手を主体にするか自分を主体するかによって表現を変えるのは、実際面倒なことである。「くださる」でも「いただく」でも、実質的な意味は同じで、相手に対する敬意を示せるのだから、常にどちらかに決めておいてすむなら、とても楽である。その場合に「いただく」が選ばれたのである。

それは、「くださる」が尊敬語であるのに対して、「いただく」が謙譲語であることが関係している可能性が高い。つまり、最近の人には、相手に対して直接敬意を示さない謙譲語の方が、現代敬語の「軽さ」にふさわしく感じられるのではないか。いずれにせよ、こうして、尊敬・謙譲両表現が可能の場合に謙譲表現への一本化現象が生じている、と考えることができる。

4 「させていただく」をめぐる問題

最後に「させていただく」を取り上げる。この用法に関しては、文化審議会国語分科会「敬語の指針」に解説がある。そこでは、「させていただく」の使用条件として、

「許可を受けている」と「恩恵を受ける事実や気持ちがある」の2つを挙げている。しかし、現実社会ではその説明で収まることはなく、

(10) それではご挨拶させていただきます。

(11) 本日、休業させていただきます。

(12) 大学では経済学を専攻させていただきました。のような2条件から外れる用例がよく見られる。また、それに対する批判も、インターネットのあちらこちらで取り上げられている。要するに、多くの人が実際に使用している一方、その使用の是非について気になる表現なのである。

この用法の流行・拡大については、椎名美智氏が著書で詳しく論じている。それによれば、以下のような内容が指摘されている。

①かつての「いたす」「お…する」「てあげる」などの謙譲語は、使用につれて敬意が減ってしまい（敬意漸減）、それを補完するために「させていただく」が使われるようになった。

②「させていただく」は「帰る」「歩く」など謙譲語を作れないような動詞でも適用できる点にも広がる理由がある。

③「させていただく」は若い世代にとっては、話し手と聞き手の間にほどよい距離感を作る点で使いやすく、「させてくださる」では強制的なニュアンスを強く感じさせる。

いずれの指摘も説得力があると感じる。ただし、それでは、なぜ謙譲語の形式における敬意が減じたのだろうか。なぜ、謙譲語にする必要のなかった動詞にまで謙譲語のような形式を作ろうとする必要があったのか。なぜ、「させてくださる」が強制的で「させていただく」がほどよいのか。このような疑問が残る。

5 「させていただく」に関する仮説

これらの疑問について、次のような解釈で解決できるのではないかという仮説を、私なりの考えとして以下に述べる。

①の謙譲語における敬意の漸減現象についてだが、一見、確かに謙譲語における敬意が減少しているように見えるかもしれない。しかし、敬意の減少は、謙譲語形式の表現における敬意が減少したのではなく、謙譲語形式

の表現に謙譲語としての機能を認識しなくなり、かつての謙譲語の表現を単に“丁寧な言葉”として意識しはじめたことを意味すると考えられないか。つまり、

謙譲語が持っている「相手を立てる敬意」を認識しなくなり、「相手の存在への配慮」程度のもの（＝丁寧な言葉）と認識するようになった。

というのが仮説の基本的な立場である。

謙譲語「あげる」が丁寧語化しているという指摘がされて久しい。「赤ちゃんにミルクをあげる」「ペットに餌をあげる」という言い方に違和感をもたない人が多くなっているのは今さら言うまでもないだろう。この現象について、「あげる」を「やる」の謙譲語ではなく、「やる」がぞんざいな語で「あげる」をその丁寧語として捉えているとするのが、「あげる」の丁寧語化説である。つまり、本来、謙譲語であった「あげる」が丁寧語になったという解釈である。

それならば、その解釈の「丁寧語」を“丁寧な言葉”と言い換えても、解釈の方向に大きな差はない。謙譲語「あげる」は、これまでの敬語システムの範疇の丁寧語さえも超えて、単なる“丁寧な言葉”として認識されるようになったと捉えるのが、筆者の見解である。

また、「ご案内していただく」「お伝えしていただく」の誤用形式も増加している。本来は謙譲語形式の「お（ご）〇〇いただく」とすべきところを、「お（ご）〇〇していただく」としてしまっている例が多く見られる。

その場合、「お（ご）〇〇し+て+いただく」という形式が成立するため、前半に「お（ご）〇〇し」という謙譲語が存在することになる。この〇〇の部分、上の例で言えば「案内する」「伝える」という相手の行為が該当する。つまり、相手の行為に謙譲語を当てはめることになってしまうという誤用である。

これについても、「お〇〇する」の敬意が減ったというより、謙譲語だという認識そのものがなくなったと捉えれば、その間違いの発生に首肯できる。「案内していただく」「伝えていただく」では丁寧さが足りない。だから「ご」や「お」をつける。そのとき、「ご案内し」「お伝えし」が謙譲語になることに気づかない。謙譲語の役割である「行為者の行為を低めて、行為の向かう先を立てる」などという認識がない（もちろん、すべての人ではないが）と考えられるのである。

この問題でも、謙譲語の役割が認識されなくなり、“丁

寧な言葉”が求められている、と捉える仮説の立場が成立する。

②の謙譲語にする必要のなかった動詞にまで謙譲語のような形式を作ることも、謙譲語における本来の役割の認識がなくなり、そのような場合には“丁寧な言葉”を志向するようになったと考えたとすると辻褄が合う。

謙譲語の本質の条件である「その行為・動作の向かう先を立てる」が成立するには、当然、「向かう先」がなければならぬ。しかし、謙譲語という枠をはずせば「向かう先」は不要である。つまり、目指すものが“丁寧な言葉”というだけの認識であれば、「向かう先」がなくてもよい。「帰る」や「歩く」という行為に「向かう先」がなくても、“丁寧な言葉”を目指す心が「帰らせていただく」や「歩かせていただく」を生み出したと考えることができる。

要するに、「させていただく」は、それを多用する人々には、謙譲語ではなく“丁寧な言葉”と認識されていると捉えるべきなのだ。そのように考えれば、どんな動詞にでも付けられるということの説明がつく。

では、③の「させてくださる」が強制的で「させていただく」がほどよいについてはどうか。

例えば、目上の人のもっている資料のコピーをとることを許可してくれたとき、

A（目上の人）が）コピーをとらせてくださった。

B（私は）コピーをとらせていただいた。

の両表現が可能である。このように同じ事態に対して、尊敬、謙譲をどちらの表現でも可能なときに、Aの尊敬タイプが好まれず、Bの謙譲タイプが優勢なのである。

AとBの違いは何か。「3. いただく > くださる」で述べたように、主体の違いである。Aは相手（目上）の行為であり、Bは自分の行為である。同じ事態を相手の行為だと認識すると、相手は尊敬の対象という存在になる。そして、尊敬語で表現される行為の向かう先は自分である。行為に自分もかかわっているため、尊敬語を使った瞬間、相手と自分の間に明確な上下関係が言語上に示される。それに対して、自分を主体に表現すれば、謙譲語を使うことになる。謙譲語は行為の向かう先を立てることになるはずで、本来は、やはり上下関係が明示されるはずである。

しかし、この謙譲語の認識が崩れていたら、向かう先を立てるという認識もない。その結果、上下関係は成り

立たない。尊敬語の場合は、行為の主体を立てる認識はあるが、謙譲語は「丁寧な言葉」であって、だれかを立てるといふ認識はない。尊敬語には上下関係が意識させられる“重さ”があるが、「丁寧な言葉」には“軽さ”が感じられる。それが、「強制的」と「ほどよい」の違いと解釈できないか。

この仮説が正しいとすると、筆者が第2章と第3章で述べてきたことを少し訂正しなければならない。

「2. 「…してもらっていいですか」の使用拡大」では、その現象に対して

- * 本来、敬意を示さない表現形式に、今や敬意が存在するかのように人々が思い始めた。
- * その背景に、現代敬語に対する“軽さ”の意識が潜んでいる。

と述べた。後者はそのままいいが、前者に関しては、

- * 本来、敬意を示さない表現形に、「丁寧な言葉」の価値を認めて好んで使用するようになった。

とすべきであろう。「…してもらっていいですか」を好む人たちは、敬意を認識する必要がないと考えている可能性が高いからである。

また、「3. いただく > くださる」では、「いただく」が「くださる」よりも優勢であることについて論じた。そこで、

- * 両者の使い分けの精神がなくなっている。
- * 尊敬、謙譲の両方の表現が可能な場合に謙譲表現への一本化現象が生じている可能性がある。

と述べた。しかし、前者はともかく後者について、より厳密に言うならば、

- * 同じ事態で、尊敬、謙譲の両方の表現が可能な場合は、尊敬表現が避けられる。

とすべきであった。結果として選ばれる表現について謙譲語だという認識がない可能性が高いからである。

6 まとめ

以上、敬意・敬語表現に関して、3つの言語形式を取り上げ、それらが多用される理由や背景について考えてきた。そこに共通するのは、謙譲語に関する認識の変化である。謙譲語の基本である「自分の行為を低めて行為の向かう先を立てる」機能を認識しなくなり、単に自分の行為を丁寧にするものと認識するようになりつつあることである。

もちろん、この現象がすべての人に起こっているわけではない。さらに言えば、ほとんどの人には、敬語の機能などに関心はあるまい。現実には、周りの人が使っているから、その表現を自分も使う、という程度の意識だと思ふ。

それでも、本稿で述べてきた、これまでとは異なる敬語の用法を実践する人たちには、旧来の敬語システムで説明されてきた認識が存在していないことになる。そして、敬語の働きに関して明確な認識は持っていないとも、これまでと違う用法を実践していくうちに、「丁寧な言葉」を志向する意識は生まれ育っていくはずだ。

そのような意識がさらに進めば、どうなるのだろうか。現在の敬語システムは、3種類もしくは5種類から成り立っているが、やがて「尊敬表現（仮）」と「丁寧表現（仮）」の2種類に変化するのではないか。目上の人物の行為について、その行為が自分と直接の関係がなければ、目上の人物を主体とした「尊敬表現（仮）」を使い、自分と関係があるときには、自分が主体となる「丁寧表現（仮）」を使う。その「丁寧表現（仮）」には、形の上では現在の謙譲語も含まれる。

例を挙げよう。先生が昼食を食べた、部長がパーティーで挨拶をした、のように、目上の人物の行為が自分に直接かわからない場合は、

(14) 先生が昼食を召し上がった。

(15) 部長がパーティーで挨拶された。

のように尊敬語を使って表現する。これによって、目上の人物に対して、自分とは関係のない客観的な敬意を示すことになる。これが未来の「尊敬表現（仮）」である。

それに対して、目上の人物の行為が自分に直接関係がある場合は、先生が自分に本を与えた場合や、部長が自分に声をかけた場合などである。その場合に

(16) 先生が本をくださった。

(17) 部長が声をかけてくださった。

とは表現せずに、

(16') 先生に本をいただいた。

(17') 部長に声をかけていただいた。

となる。本来なら、「いただく」によって自分から目上の人物に向かっての敬意が存在しているのだが、その敬意の認識がなく、単に自分の言葉遣いを丁寧にしたという認識で(16')(17')の表現がされるのである。これが未来の「丁寧表現（仮）」である。

この現象は、明らかに現在の敬語システム、特に謙讓語を中心とする用法を崩すものである。そして、やっかいなことに、見た形式ではとんでもない誤用というより、ズレた用法程度に収まっている。

未来の敬語システムは、現在のシステムから大きな変貌を遂げるかもしれない。あるいは、現在のシステムが部分的に壊れて、少しの変化でとどまるだけかもしれない。

しかし、いずれにせよ、変化は確実に起こっている。そして、変化の過程において、コミュニケーション上のトラブル、特に、新旧世代での軋轢が生じることは間違いない。学校教育の現場では、一応、旧来の敬語システムに基づいた指導を続けている。その一方、インターネットの世界では、中途半端な説明によるビジネス敬語の教育が横行している。このままでは、今後、敬語の使用法について混乱度が増すばかりである。少なくとも、企業現場では、今一度改めてまっとうな敬語教育に取り組むべきではないか。

参考文献

- [1] NHK 放送文化研究所、最近気になる放送用語「教えてください」？「教えていただき」？、2011
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/146.html>
- [2] 佐竹秀雄、此比（このごろ）巷二ハヤル物（ことば）
—誇張 短縮 非断定 安直敬語 非自主性— 武庫川女子大学言語文化研究所年報 30、2020
- [3] 文化審議会答申、敬語の指針、2007
- [4] 椎名美智、「させていただく」の使い方 日本語と敬語のゆくえ、KADOKAWA、2022
- [5] 椎名美智・滝浦真人、「させていただく」大研究、くろしお出版、2022